

令和7年10月27日

安全に係る標語・論文の入選作品について

このことについて、次のとおり入選作品を選定しましたのでお知らせします。

1 募集概要

- (1) 募集期間 令和7年7月10日から令和7年8月22日まで
- (2) 応募数等 (標語) 200作品
(論文) 7作品

2 審査の概要と結果

(1) 審査・選定方法

(標語)

- (ア) 事務局は、応募作品が応募方法を満たしているかを確認し、作者および所属企業が特定されないよう応募作品をランダムに並び換えた一覧表を作成し、審査委員に配布した。
- (イ) 審査委員は、選考基準に基づき31作品（1作品1点）を選考し、事務局は、各委員の選考結果を集計した。
- (ウ) 得票数の多い順に「最優秀」、「優秀」、「入選」とし、得票数が同一の作品は、労務管理委員による最終選考で決定した。

(論文)

- (ア) 事務局は、応募作品が応募方法を満たしているかを確認し、作者および所属企業が特定されないようにして審査委員に配布した。
- (イ) 審査委員は、選考基準に基づき上位3作品（一位5点、二位3点、三位1点）を選考し、事務局は、各委員の選考結果を集計した。
- (ウ) 得票数の多い順に「最優秀」、「優秀」、「入選」とし、得票数が同一の作品は、労務管理委員による最終選考で決定した。

(2) 審査基準等

(標語)

標語の審査にあたって、次の点を考慮しながら評価を行う。

- (ア) テーマ性（労働安全衛生の視点をとらえ、募集テーマを表現しているか）
- (イ) 表現性（内容がわかりやすく、読み手が理解できるものであるか）
- (ウ) 独創性（簡明に表現し、ユニークで啓発資材に使用できるものであるか）

(論文)

論文の審査にあたって、次の点を考慮しながら評価を行う。

- (ア) 問題意識が明確で、課題設定が適切であるか。
- (イ) 事実調査・文献資料などの探索が十分にできているか。
- (ウ) 調査分析の内容の記述や展開が説得的であるか。
- (エ) 内容にオリジナリティがあるか。
- (オ) 論文としての体裁が整っているか。

3 入選作品

別紙のとおり

4 審査委員

18名（労務管理委員16名、外部有識者2名）

■令和7年度 安全に係る入選標語

賞	作 品	会 社 名	応 募 者
最優秀	まあいいや 思った時こそ 要注意	(株)不二ビルサービス	山本 淳
優秀	慣れた作業 心の油断が 事故招く	合同産業(株)	山崎 義則
優秀	ゆとりある 時間と車間で 事故防止	(株)JR西日本中国メンテック	大武 正司
入選	床を磨くもプロの技、安全に磨きをかけるも プロの技	(株)第一ビルサービス	柳瀬 昌央
入選	迷った時にはまず確認！！ 指差呼称でゼロ災害	持続未来(株)	山崎 豊美
入選	まあいっか！自己判断より 報・連・相	(株)チューゲイ	萬谷 さゆり
入選	小さなヒヤリ 積み積みもって 大災害	(株)不二ビルサービス	松本 浩介
入選	気を抜くな 慣れた作業に 落とし穴	(株)広島リバイン	新谷 優実
入選	安全は 小さな気付きの 積み重ね みんなで築こう ゼロ災職場	(株)カルフート	吉田 祐司
入選	いつもと違うと気づいたら 一步下がって安全確認	(株)JR西日本中国メンテック	山本 眞理
入選	「だろう」より「かもしれない」で 取り組もう	(株)西日本ファシリティ	安田 豊
入選	まあいいか 軽い気持ちが 事故を呼ぶ	太平ビルサービス(株)広島支店	前田 圭三
入選	気が焦り 確認不足が 事故のもと	合同産業(株)	藤川 研二
入選	安全は 基本忘れず 手を抜かず	広陽ビル管理(株)	新田 豊治
入選	熱中症 まだ大丈夫が 命とり！	ビルックス(株)	西尾 幸子
入選	転ぶかも、常に想定、濡れた床	ひろしま管財(株)	田中 武士
入選	安全は 一人ひとりの 意識から	(株)コーエー	斉田 泰幸
入選	したはずだ そう思うより 再確認 ヨシ！	(株)オオケン	小野 光正
入選	災害は 小さなヒヤリの 積み重ね 事前に摘みとる 危険の芽	(株)カルフート	塙 清志
入選	「おかしい」と 感ずる予兆は声に出す その一言が防波堤	(株)不二ビルサービス	中本 隆則
入選	まあいいか 後で後悔 時遅し	太平ビルサービス(株)広島支店	シエッド 紗和
入選	危機意識 高める努力に 事故は無し	(株)不二ビルサービス	堂園 光一
入選	まだ出来る その過信で 熱中症	(株)広島リバイン	堅田 秀夫
入選	鏡見て 笑顔でスタート 心掛け	(株)三原美装社	阪本 玲子
入選	気の緩み 怠慢 横着 迫る危険	(株)JR西日本中国メンテック	岡本 光恵
入選	ひと呼吸、無理せず休もう 暑さ対策	(株)広島リバイン	相原 伸次
入選	あせらず！無理せず！油断せず！ 一息ついて無災害	持続未来(株)	松永 邦治
入選	大丈夫！ その大丈夫 大丈夫？	(株)ビーグルエッセ	三宅 賢一
入選	大丈夫 なれた仕事に 落とし穴	太平ビルサービス(株)広島支店	二宮 和博
入選	おかしいな やめる勇気で ゼロ災害	(株)JR西日本中国メンテック	飯田 裕樹
入選	だろう作業は事故のもと、かもしれない作業で守る安全	八洲管理(株)	奥村 洋平

■令和7年度 安全に係る入選論文

賞	論文タイトル	会 社 名	応 募 者
最優秀	心理的安全性の確保とヒヤリハット報告体制の構築について	(株)JR西日本中国メンテック	岡本 樹乃
優秀	ビルメンテナンス業における熱中症と労働災害予防の重要性	(株)コーエー	瀬川 雄貴
入選	事故の連鎖を断ち切る	合同産業(株)	吉川 厚志
入選	安全作業の取り組み	(株)JR西日本中国メンテック	本間 和也

心理的安全性の確保とヒヤリハット報告体制の構築について

株式会社 JR 西日本中国メンテック広島支店

広島西事業所

岡本 樹乃

現在、私の所属する会社では「心理的安全性」という言葉が頻繁に議題として取り上げられている。「心理的安全性」とは、「組織の中で自分の考えや気持ちを、誰に対しても安心して発言できる状態」を指す。

私は普段、広島駅をメインとした駅ビルの清掃業務に携わり、日々仲間と共に安全を心掛けた作業を行っている。そんな私達にとって、「心理的安全性」が必要となるのはどんな場面であろうか。例えば、体調が悪化した際の申告の場面、現場で取り組んでいる「ヒヤリハット」の報告の場面が挙げられるだろう。今回は、後者の「ヒヤリハット」報告における「心理的安全性」について取り上げ、深掘していく。

私の所属する事業所では、作業中にヒヤッとしたこと、ハッとしたことが起きた場合、専用の用紙にその事象の詳細を記入し、上長に報告、またその事象を定例会議にて共有するという流れになっている。しかし、他事業所に比べると、当事業所のヒヤリハット報告数は、毎月乏しい結果となっている。この課題を改善するため、2025 年より、私を含めた三名で業務改善グループを組み、ヒヤリハットの提出率向上を目指した取り組みを始めた。

ヒヤリハットの提出率を上げるためにはどうすればよいか。チームで考えた結果、様々な意見が出されたが、我々はまずヒヤリハットの報告手順に注目した。改善案として、用紙の簡易化、また記入フォーマットのデジタル化などが挙げられ、より報告者が簡単で気軽に提出できるような工夫を施した。このように、我々のチームで取り組んでいる内容としては、主に報告手順そのものの改善がメインである。しかし、報告方法だけではなく、我々のヒヤリハットに対する意識にも課題があるのではないかと、私は主張したいのだ。

私達は、ヒヤリハットに対しどんな印象を抱いているのだろうか。もちろんそれは、人によって多種多様であろう。しかし、やはり報告の際に伴う「自身の不注意による出来事をさらけ出す不安」は、大多数の者が持っているに違いない。私が勤務している現場は駅ビルの清掃がメインだが、他事業所で行われている車両清掃に比べると、起こり得る危険のレベルも、発生確立も格段に下がる。設備の不具合や天候に左右され発生した事象はともかくとして、自分の不注意が起因となった小さなミスは、むしろ報告しない方が都合良いと考えがちだ。さらに、仮にいくら不注意を叱責されない環境が構築されていたとしても、そこまで大きな危険が引き起こされる可能性が少ないと作業者が判断したならば、わざわざ事象を報告するという考えには至らないだろう。では、そのようなマイナスの意識を払拭するためにはどうすればよいのだろうか。

ここで、ヒヤリハットの報告を「心理的安全性」と結び付け考えていく。心理的安全性を確保するための要素として、まず「報告される側が叱らず受け入れる体制」が挙げられるが、こちらは既に実現されているものとして扱う。よって問題は、報告する側の意識にあると考える。いくら報告の際に叱責を受けないといっても、先述したように「わざわざ」自身の不注意による出来事を報告する義務は作業者にないのだ。であるとすれば、「わざわざ」報告しようと思えるような考え方を、作業員間で浸透させる必要が出てくのではないか。

ヒヤリハットは、上長に報告する事がゴールだと思いがちだ。しかしそうではなく、ヒヤリハットの報告を通して、同じ職場で働く「仲間を守るための手段」として捉えるのである。報告事象がたくさん上がれば、より安全な作業動線を導き出すことが可能になる。また、その事象に従業員間にも周知することで、類似の事象を未然に防ごうという意識の向上にも繋がる。そのために、自身の不注意が招いた事象でも、仲間を守るために繋がるのであれば、報告しよう、と作業者が考えに至る。ヒヤリハット報告を、「上長に自身の不注意をさらすこと」とマイナスに捉えるのではなく、「仲間を守るための手段」とプラスの方向に捉えることで、「この報告で仲間を守ることに繋がる」「私は良いことを行っている」と、精神的にも安心して報告することができるのだ。

以上のことから、ヒヤリハットにおける「心理的安全性」を確保するためには、作業側意識の改革が必須であると結論付けた。今後は、現在取り組んでいるチーム活動において、ヒヤリハットの提出率を向上させるべく、より作業者が安心して報告できる環境、仲間を守るための意識づくりを構築することを目標とし、日々の業務に励んでいきたい。